
魔界の扉を叩くとき

KINU KAZU

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔界の扉を叩くとき

【Nコード】

N9520W

【作者名】

K I N U K A Z U

【あらすじ】

蒼空は魔界の扉を叩く……。その時、物語は動き出す。

魔王と勇者が封印されてからちょうど1000年。復活した魔王を倒すために、蒼空は魔界へと旅立つ。魔王討伐チームのメンバーは蒼空と義妹と復活した勇者。え—————？ 勇者は女！？

これは僕の『魔界大戦』の改変ver.です。より良くしようと書きました。その分、話は全く違ってきます。なので魔界大戦を読む

必要はありません。一部設定を残し、話を進めます。魔界大戦を読
んでくださっている方、良ければ見てください。キャラも増えます。
魔界大戦を良くしようとした作品ですが作者の自己満足に終わる可
能性があります。そうなるのは嫌なので、色々アドバイスください。
辛口コメントでも大歓迎です。

第一話 夢（前書き）

K I N U K A Z Uと申します。

まずこの作品についての話をしたいと思います。

この話は僕の『魔界大戦』の改変ver.となります。

設定を一部流用。そして別の話にしていきます。

全く別とはなりません。いろいろ変えます。

『魔界大戦』は読まなくても問題ありません。

『魔界大戦』を読んでくださっている方でも楽しんでいただける作品にしたいと思います。

『魔界大戦』の改変ver.ですが、話の進め方とかは全く別だし、キャラ増えているので、『魔界大戦』はそれはそれで完結させます。

この作品は『魔界大戦』をよりよくしたいと思う作者の気持ちから始めました。

こうした方がいいかも……。ここをこうすればよかった。そう思う事が多々あったので。

しかし、別によくなっていなくて、作者の自己満足になっている場合は言って頂るかスルーしてください。

こうした方がいいというのがあればお願いします。

では、お願いします。

第一話 夢

「もう、これしかない、俺ごと封印しろ？」

金髪で顔もかなりいい、戦闘服に身を包んだ男が少し後ろを振り返りながら叫ぶ。

だがそれも一瞬のことで、すぐに前の黒い服を身を包む男に向き直り、剣を振るう。

黒い服に身を包んだ男も応戦し、剣と剣がぶつかり、火花を散らし、音を響かせる。

すごい……。そう声を上げるしかない。

黒い服の方の剣はかなり長く2mはあるだろう。そして剣はどこか禍々しい。

その剣を全く剣に振られることなく扱い、攻撃をしている。

金髪のイケメンの剣はどこか神秘的で西洋風の剣だった。長い剣は小回りが利きにくい。その利点をうまく利用して色々な角度から攻撃を繰り返していた。

武術を、剣術をやっている蒼空。しかし、そんなことはまず無理だろう。そう思わせる次元の戦いだった。

剣の応酬が続く中、

「早くしろ？ この期を逃すと……世界は終わる？」

金髪の男が叫ぶ。すると黒い服に身を包んだ男が焦ったように剣を振り下ろし、叫ぶ。

「我を封印などできるはずがないだろう」

「なら、何を焦る？ 真地、やるんだ。世界の平和を勝ち取り、消える。それは本望だ。やれ？」

そう金髪の男が叫ぶと、後ろに居た戦闘服を纏ったもう一人の男が、顔の造形もかなりいいその顔を涙でぐちゃぐちゃにしながら、「分かった」

それだけ言うと、一度、空を仰ぎ、何か唱えるように言う。

すると、ついさっきまでは良く見えなかったが、金髪の男と、黒い服を着た男の下、魔方阵と思しきものが光り輝き、二人の男を包んでいく。

金髪の男はほっとしたような、そんな顔をし、黒い服に身を包んだ男は焦ったようなそんな顔になった。

「……………これで、最後だ。■■■■、君のことは忘れない。世界の平和のために戦った、君のことを？」

名前のところはよく聞き取れなかったが、涙を浮かべた男が言い、何かを投げ入れた。その言葉と行動を見た、金髪の男は優しげな顔で頷き、

「ありがとう。……………やってくれ」

「ああ。…………『天から降り注ぐ光よ。彼らを包み、永遠の眠りを与えよ』」

そう唱えると、より一層、光が強くなる。

目も眩むほどの光が世界を包む。すると悲痛な、いや恨みがこもったドスの利いた声が響き渡る。

「我はこれで終わらぬ。必ず、必ず戻り、復讐を、世界を！……………手に入れる？」

その声が響き渡った後、光は薄らいでいく。そして光が完全に消え去り、視界が良くなった。

涙を流す男の手には日本刀のようなものが握られている。

男が見る先には先ほどまで戦っていた二人の姿はなく、一冊の本が転がっていた。

？　？　？

「ふぁゝあ」

蒼空は欠伸をしながら目をこすった。

そして近くにある時計に目を向ける。時計が示す時間は5…00。高校二年生が夏休み初日に起きるには少し早い時間だった。

しかし、蒼空にとっては普通だった。

なぜなら蒼空は武術の心得があるから。こういうのは怠けるとすぐにダメになる。

だから蒼空は早朝ランニングを日課にしているのだ。

蒼空はベッドから降り、ジャージに着替える。

髪を整え、顔を洗い、まだ寝ているであろう家族を起こさないように静かに外へ出る。

そして日課である早朝ランニングへと出かけた。

「ふっ、ふっ、ふっ」

軽く息を弾ませ走る。なぜか今日は体が重い。

「なんか、嫌な予感しかない……」

蒼空は呟く。こういう時の蒼空の勘はよく当たる。

多少気が重いものの蒼空はランニングを続けた。

いつも通りの距離を走り終え、家の前に蒼空は着いた。

その時間は6…00丁度。

一時間近く走っていたことになる。

しかし蒼空は肩で息をしているものの、大して疲れた様子もない。蒼空は玄関の扉を開け、

「ただいまー」

そう言い、家へ入る。

この家に住むのは自分を含めて四人。

父と母が起きる時間はだいたい6…30。

同じ学校に通うためにこの家に居候として来た従妹だけは丁度蒼空が起きてから少しして起きるようだ。

「おかえりー」

そう声がかかる。先も言った通り、この家に住む者の起きる時間

は6・30。

つまりこの声は義妹のものだ。義妹ということは本当の妹ではない。といって血が繋がっていない訳でもないが。漣の親父さんは父さんの弟。つまり従妹だった。

だが10年前。漣と両親が乗る車が事故に会い二人は死んだ。漣も重傷で医者は絶望的だと言っていたが、奇跡的に傷跡も残らず治っている。まあそんな事があり、父さんたちは漣を引き取り娘として育てた。だから義妹という訳だ。

その漣は蒼空の前まで来ると、

「今日もお疲れ様、お兄ちゃん」

そう言いタオルを渡してくる。

「ああ、ありがとう」

渡されたタオルで汗をぬぐう。

そして漣と一緒にいつも通り他愛もない話をしながらリビングへと向かう。

そこにはお茶が用意されていて、

「水分補給しなよ」

「ん」

蒼空はそれだけ言うとおっぱを受け取りお茶を飲む。

いつもながら気が利くな。

「いつもありがとう。漣」

笑顔で言う漣は少し頬を赤く染めた。

「どういたしまして」

漣は少しほほ笑む。

漣は蒼空をお兄ちゃんと慕ってくれている。別に呼び方なんてどうでもいいが、途中から漣の兄になったのにそう呼ぶのか聞いてみた所。『ん、嫌だった。男の子ってこういうのがいいんじゃない』とかいって考え込んだ。蒼空はそれに『別に聞いただけだから気にしなくてもいいよ』といったらすぐ考えるのをやめたが。

「お兄ちゃん、シャワー行く？」

「え、ああ。そうだな」

蒼空はタオルを置き、風呂へと向かった。

蒼空がシャワーを浴びてリビングへ戻ると、リビングにはみんな揃っていた。

「おはよう」

「おはよう、蒼空」

そう端的に会話が済まされる。

別に家族仲が悪い訳でもない、どちらかと言えばいい方だろう。だけど会話はそこまですることもないし端的だ。

「ああ、蒼空。爺さんがお前に修行に来るように言ってたぞ。夏休みの間、行ってきたかい」

「ええ！？ 貴重な休みが……」

「お兄ちゃんが行くなら私も行く」

「濡はいいんじゃないか？ 爺さんが言ってたのは蒼空だけで濡は言ってなかったし」

「でも、私も一応おじいちゃんの弟子だし、悪い虫がお兄ちゃん付いたらダメだし……」

「なんか言った？」

「何も言っていないよ、お兄ちゃん」

濡は笑顔でそう返す。

「はあ。変な予感はいか……」

ガックリ肩を落として蒼空は言った。

何はともあれ夏休みは色々疲れそうだ。

第一話 夢（後書き）

もっとうとした方がいい。読みにくいなどあれば言ってください。
辛口コメントも全然OKです。

たくさん感想、お待ちしております。
気に入って頂ければ、続きが気になるなどあればお気に入り登録
お願いします。

今日は9月25日。作者の誕生日です。
言わってくださると嬉しいですww
では。

第二話 雪景

いつからだっただろう？ 俺が武術を始めたのは。俺が武術をやっている理由。

それは「いつか必要になる」そう、爺さんに言われ、やった。ただそれだけ。「強くなりたいから」そんな事はない。強くなって、どうする。という事だ。「誰かを守りたい」そんな事もない。この国にはそんな切羽詰まったようなこともないから。

だけど、蒼空は思った。

何か……。何が起こる。何が起こるかは知らない。しかし、それが自分にとって意味あることになる。そう蒼空は、直感した。

「お兄ちゃん。次の駅で降りるよ」

一つしか年齢の違う義妹。滯が空の顔を覗き込むようにしていった。

「え、ああ……」

「もう、ボーっとして」

「そう？」

「そう」

「……そうか」

蒼空は、外の景色を眺める。

ボーっとしていたのは本当のようだ。かなり山深い所まで来ている。

電車に乗る客も端っこの方に座っているおばあさんくらいだ。

「ボーっとしてるとおじいちゃんにやられちゃうよ？」

「ははっ。そうだな。爺さんは容赦ないから……」

「だね。……うーんと、お兄ちゃんってお爺ちゃんに誘われて修行、始めたんだっただよね」

「えっ？ ああ、そうだけど……」

「けど、なんで？」

「なにが？」

「お兄ちゃんがまだ修行とかを続ける理由。もう十分強いのに。お爺ちゃんくらいしかお兄ちゃんに勝てないくらいに」

「……………」

蒼空は黙る。

この義妹には、心を読む才能があるのか。そう思う。

蒼空がまだ、武術をやっているのは、せっかく努力して手に入れた力が無くなるのは嫌だ。もう習慣になったという理由で続けている。先も語った通り、大した理由はない。

だから、この夏休みの間。爺さんに付き合って、それからやめようと思う、蒼空は考えていた。

何か……。そう、何かあった場合は別だが。でも、何か。そんなものは勝手に自分が思っただけで、何か特別、変なことや凄い事が起きる訳でもない。そう、それが普通。それが世界の理。

だから、蒼空はテキトーに、それでいて適当に。

「お前を護るため」

そうサラツと言うと、漑は顔を真っ赤にして慌てふためいている。真っ赤になってあたりをキョロキョロして、「はう~~~~」とか、いろいろ言った後、俯く。

こういう漑はかわいい。いや、漑は普段から美人だし、かわいい。顔はかなり整っているし、なにより性格がいい。それに家庭的だ。学校でもかなりの男子が漑を狙っているのも知っている。

そんな漑が、上目づかいで。

「本当？」

そう、聞いてくる。一般的な十七歳男子ならここで倒れているだろう。それぐらい、破壊力があった。いつも一緒にいる蒼空でもそ

う思うぐらいだから、それは相当なものだった。しかし、蒼空は一緒にいるので少しは耐性もついている。蒼空はニツコリ笑って。

「嘘」

と、言ってみる。すると見る見るうちに落ち込んだような顔になっていく。その眼には涙まで浮かんでいた。

「冗談。お前に何かあったら守りたい。いや、守ってやる」
すると打って変ったように笑顔になる。

蒼空が言った事。それは本心だ。漣を守りたい。しかし、これは武術をやっている理由にならない。いや、ここまでと、言った方が正しいか。この国で起きる、漣に降りかかりそうな事件。それはあっても強姦魔や通り魔と言った物だろう。そんな者に対する対処。それができるような実力はとうの昔についている。今ではもう、並大抵のものでは蒼空を倒せないくらいに強くなっていた。理由もなく。おそらく最初の際は漣や家族を守りたいと思う心はあったのだろうが、今は違う。守って見せるが、それは簡単で、目標に掲げるまでもないもの。と、いう風に蒼空の中での認識はなっていた。

「まあお前は自分で守れるんだろうけど……」

そう呟く。漣は漣で武術をやっている。今はもう鍛えたりはしていない。だが普通に一般人より強い。

「でも、好きな男の子に守ってやるって言われると女の子は嬉しいものなんだよ……？」

「……？　なんか言ったか？」

「な……なんでもないよ」

少し拗ねたような、それでいてどこか恥ずかしそうな感じで漣は呟いた。

？　？　？

「蒼空、この刀を取れ」

蒼空は爺さんに唐突に言われる。

「はい？」

蒼空は全く意味を理解できないでいた。

蒼空と滯は爺さんの家へ、天国への階段とまで称される階段を登り切り、たどり着いた。山の頂上に位置するこの家。だからここは心なし、酸素が薄い。だからかなり蒼空は疲れているのだが、すぐに爺さんに来るように言われ、道場に座っている。

そして言われた意味の分からない言葉。……言葉の意味は分かるがなぜそれをしないといけないのか分からない蒼空は頭の上にはてなマークを浮かべ聞く。

「この刀を取るだけじゃ。簡単じゃろ？」

爺さんはそう答え、刀を前に突き出してくる。

それを蒼空はまじまじと眺める。蒼空の斜め後ろでは滯が興味深そうにのぞきこんでいた。

「これは……」

蒼空は呟く。そして蒼空は思考する。

これは夢の……。夢の男が持っていた剣にそっくりだ。これがなぜここに？ それにあればただの夢のはずでは……。そう蒼空は考える。

しかし……考えても無駄か。そう思った蒼空は剣を受け取る。

瞬間——。

蒼空は手に刀が吸い付くような、元から蒼空が振っていた刀だと思わせるぐらいの感覚に陥る。

そして、室温が下がったような。そんな感じに襲われる。それも一瞬のことで蒼空は爺さんを見る。

「これは？」

「その刀の名は『雪景』ゆきげしや。この家に伝わる、ご先祖様が使っていた刀」

「『雪景』……」

蒼空はそう呟いた。その名前を言った瞬間、蒼白い光が刀から発せられる。

すると蒼空の意識は一気に持っていかれた。

そこは蒼い。

蒼空は水面の様な蒼一色で満たされたところに立っており、見上げた先の空は蒼い。

すべてが蒼一色で埋め尽くされている。そこには蒼空しかたっていない。蒼空しかない。辺りを見回しても、叫んでみても誰もいない。

「ここは……？」

そう呟いてみる。蒼空は答えが返ってくるのを期待して呟く。すると声が響いた。

『貴様は？』

空から空中から声が聞こえた。蒼空は体を低く、低くしていく。何が起ころうとも対処できるように。蒼空は訓練されたようにそうする。

そしてそれから声を出す。

「俺の名前は氷堂蒼空。お前は誰だ？ どこにいる？」

『私はそこにいます』

「どこだ！」

蒼空はあたりを見渡す。見渡しても誰もいない。風景は変わっていないかった。それでも、声の主はそこにいると言った。

『貴様の目の前だ。集中しろ。我を認識しろ。我はそこにいます』

蒼空は言われた通り、集中する。そして前を睨む。

そこには一人の青年が立っていた。

青い髪。蒼い目。碧い翼。それらを青年は持っていた。

その姿はとても堂々としていて、綺麗で、美しく、格好良かった。

「あなたは？」

その青年の神々しさに当てられ、蒼空は敬語になる。

『我は――。』

「え？」

『貴様は氷堂蒼空。真地の子孫か』

「真地？」

『貴様は自分の先祖も知らんのか。……ふむ、まあいい』

「それよりあなたの名は」

『無駄だ。とりあえず名乗ったがお前はまだ我の名を認識できぬ。

いや、貴様は知っているが我の前では言えぬ』

何を言っているのかさっぱりだった。

だからとりあえず、黙る。そうするとその青年は喋りだした。

『蒼空。貴様は力を欲するか？』

「力？」

『そう力だ』

「別に必要ないかな」

すると青年は驚いたような顔になる。

どこかおかしいところでもあったのだろうか。次の言葉を待つ。

『珍しいな』

「珍しい？」

『ああ。力をいらないという奴も、ここに来るやつも。まあいろいろ』

「ここに来るのは珍しいか知らないけど、力を欲しない奴はたくさんいると思いますけど？」

『そんな事はありません。人は皆力を欲する。権力を手に入れるため、金を手に入れるため、女を手に入れるため、いろんな理由で人間やその他種族は力を求める。表ではいらないと言っても裏では皆同じ』

「……………」

『貴様はなぜ力を求めぬ？』

「強いて言うなら理由がないから……かな」

『……………』

「理由は今、探してる」

「そうか……。なら理由が見つければまたここに来るといい。力を与えてやろう。貴様が……」

最後の部分は聞き取れなかった。目が回るような感覚に陥ったからだ。

そして蒼空はまた意識を失った。

第二話 雪景（後書き）

何かあればお願いします。

お気に入り登録感想等待っています。

キャラ紹介

ネタバレ注意？

読みたくなければ読まずに飛ばしてください。

ここでは攻撃力とかそういうのを表すのにアルファベットを使用しております。

強さの順としては

$$EX > SS > S > A > B > C > D$$

となっています。EXは測定不可能レベルで、Cが魔界での一般人。Bが魔界の一般兵レベルです。

Aは一般兵では及ばないレベルの強さ。

Sは元帥や騎士団長レベル。

Sレベルにたどり着くには単なる努力だけではなく才能や素質と言った物も必要。

●氷堂蒼空 ひょうどうそうくう

年齢…17歳

身長…175cm

体重…58kg

攻撃力(筋力)…B

素早さ(スピード)…A

体力…A

精神力…S

魔力…SS

得意属性…？

魔法の素質…EX

本作主人公。

氷を司る剣『雪景』の使い手。

生まれたのが、魔王と勇者の戦いが真地の封印の力により終幕を迎えてからちょうど封印が解ける次期、1000年たったとき17歳という、かなり運悪い時期にいて、さらに雪景を操る素質があるということ、封印が解けた勇者と共に魔王討伐の旅に出る。

戦う理由は魔界と地球の人々を護るためというのが謎。

お爺さんの将地から、武術、剣術を習っている。人間ではかなり強い方。だが、その程度であり魔界では一般兵より強い程度の実力。体は筋肉質で、顔はそこそこ整っている。上の下、上の中といったところ。

●氷堂滯ひょうどうみお

年齢…17歳

身長…175cm

体重…58kg

攻撃力（筋力）…D

素早さ（スピード）…C

体力…C

精神力…EX

魔力…EX

得意属性…Ω

魔法の素質…EX

本作のヒロイン。

蒼空に恋心を抱いている。蒼空とは義妹の関係。蒼空の父の弟の娘。10年前の事故で両親を失い蒼空の両親が漣を引き取ったため従妹から義妹に。

蒼空と一緒に魔界へ行く。

漣は完全な後援タイプ。魔法の素質が高い。氷堂家の血筋は魔法の素質が高いことが分かるがその中でもトップクラス。さらに得意とする魔法は魔界にもほとんど、というか一人もいないかもしれないくらい希少な伝説級の『Ω』

顔はかなり美人。上の中から上の上くらい。

今回はこの二人の紹介でした。

魔法について『Ω』？　とか思った方もいるでしょうがこれは後々本編で紹介します。

まあ一応出て来てからまとめをだしますけど。

キャラ紹介（後書き）

次話投稿の予告です。

今日、9月28日午後11時に投稿します。

お気に入り登録、感想待ってます。

第三話（前書き）

今回は次話へ行くためのステップ回です。

第三話

蒼空が目を覚ますと、そこには漑の顔があった。心配するように蒼空の顔を覗き込んでいる。

場所は道場。おそらく意識を失ってそのまま倒れていたようだ。

「お兄ちゃん？」

「……ちよつとどいてくれ」

蒼空はそう言うと、漑を少しどけて立ち上がる。

渡された剣はしっかり手に握っている。

「やはり、蒼空には資質があつたな」

爺さん……将地は、蒼空を見て、そう言う。

その顔はどこか安心したような、それでいて不安そうな笑顔を張り付けていた。

「資質？ それとさっきの事全部説明してくれ。全く理解できない」

「そうじゃな……。蒼空にはすべてを話さなければならん。これからの事を。この家の、お前の運命を」

「運命？」

「宿命とも言うかの」

運命、そして宿命。それは元から定められている巡り合わせの事。原因が同じであれば結果は同じ。そういう事だ。

それを聞いて、蒼空は思う。

運命、宿命なんてくだらない、と。だってそうだろう。元からそんなものが決められているのなら、そんなにつまらないものはない。

何をしててもそれが、運命だの宿命だので一言で済まされる。

だけど、思った事を蒼空は口には出さない。ここで、話すことでもないからだ。

それをわかっていながら蒼空は小さくではあるが呟いてしまう。

「くだらないな……」

「ははは。蒼空は若いなあ。そして強い。じゃが蒼空。運命と言うものは確かに存在する」

「……？」

「分からないじやろうな。じゃが、すぐに分かるじやろう」

そう、すぐに。嫌でも理解させられる。そう、将地は付け加えた。

「まあ、いい。で、爺さん。それを教えてくれ」

「その前に……漣。ここからは、前に話す事ができない………
…え？ 漣がか？ ……ああ。分かった」

「……？」

将地は漣に、話すことはできないと言った後、一人上を見上げ誰かと話すようなそぶりを見せ、勝手に自己完結してしまっていた。蒼空や漣といった、親族でないと、危ない薬をやっているか、かなりの中二病をその年齢でありながら持っている人に見えたことだろう。

「この部屋から出て行ってくれ……。と、言いたいところだったが事情が変わった。蒼空、漣。これから話すことは事実だ。そのことを踏まえた上でしっかり心に刻め」

将地がそう言った後、何が話されるのか、いつもと違う雰囲気や放つ将地からただ事でない話が来ると感じた二人は頷く。

頷くのを見た後、将地は語りだした。

「これは、一人の魔王と、一人の勇者。そして魔界の扉を叩いてしまったご先祖様の話だ」

第三話（後書き）

次話は話ばかりになると思います。

お気に入り登録、感想等待ってます。

第四話 決意（前書き）

ちよつと読みにくいかも。

それと少し設定変えました。漣を従妹から義妹にしました。

設定としては、漣の父は蒼空の父の弟。10年前までは従妹だった
が10年前の事故で両親が死に、蒼空の両親が漣を引き取り義妹に
なった。ということにしました。

その事故で漣も重傷を負い、命が危なく、医者ももう助からないか
もと言ったほど。しかし数週間ほどで傷も治り退院。

→上のは少し重要な設定なので押さえておいてくださいね。
まあすぐ説明入りますけど。

第四話 決意

「魔界の……扉？」

漣が驚いたように声をあげる。それに対して蒼空はさほど、驚いたようなそぶりはなかった。

それもそうだろう。さっきまで、ビックリ体験をしていたのだ。

魔界ぐらいあっても別にいい。重要なのはこの後、何が来るか。

蒼空は静かに将地を見る。

「そうじゃ。……とりあえずこの説明は後にする。静かに儂の話を聞け」

そう言うのと将地は蒼空、漣と順に顔を見る。そして二人が頷くのを見ると、語りだす。

「魔界の扉を開いたご先祖様の名前は氷堂真地」

蒼空はその名前に聞き覚えがある。夢の中……。あの不思議な空間で青年が口にした名前だ。

「そしてこの刀、『雪景』の初代主である。『雪景』、この刀は普通の刀ではない。意志を持つ、力を持った刀。

光を司る剣『ルクスアルカディア』

闇を司る剣『アルグリード』

風を司る刀『疾風』

炎を司る剣『アグニース』

と並び、氷を司る刀『雪景』と呼ばれた。

これらは形状も能力も異なるが、意思を持ち、力を持っていた。そしてこれらを総称して『五本の名刀』もしくは『五天剣』と呼ばれた。

いつ、誰が、どういう意図で創ったのかは不明。神が創ったとも、天から降ってきたとも言われている。この剣たちは選ばれた物しか使えない。剣に刀に選ばれた者だけが扱う事を許される、これ以上ない武器だ。それ故に、一つの時代にすべての剣の使い手が集まっ

たことはない。これらは魔界に、ぽつぽつと使えるものが現れ、その者が死ぬと消える。

そして物語は1500年前、闇の剣『アルグリード』に選ばれた者が暴走したところから始まる。

その者は、魔界を恐怖へ、混乱へ、絶望へと落としていく。その者は魔界の人々から畏れられ、『魔王』と呼ばれるようになる。『魔王』は元は人間だった。しかし堕ちて堕ちて、人ではなくなる。しかし、『魔王』は恋をした。その者は『アルシエラ』。彼女もまた普通ではなかった。とんでもなく美人だったが、その美しさはすべてを魅了した。しかし、過ぎたモノは恐怖へと変わる。『魔王』は『アルシエラ』に魅了された。『アルシエラ』もまた、『魔王』の深く、黒く、黒い闇に魅了された。

そして二人は交わる。そして『魔族』と言うものを生み出した。魔界には『魔族』と呼ばれるものは存在していなかった。その『魔族』の力は強大だった。『魔族』から『魔王』そして『アルシエラ』は『我らの父、母』そう呼ばれる。そして強大すぎる力を持った『魔王』は世界へ侵攻を始める。

せめてもの救い。それは数が少なかった事だ。『人間』『亜人』『竜』『魔獣』『幻獣』『エルフ』『ドワーフ』『マーメイド』など、さまざまな種族の者が協力して戦った。これを【魔界大戦】と呼ぶ。500年。この間、【魔界大戦】は続く。土地を奪われたりはしなかったが、たくさんの人が死んだ。そして人々が疲弊しきっていた時、一筋の光が舞い降りる。

光を司る剣『ルクスアルカディア』を扱う、『勇者』が立ち上がった。『勇者』が振るう剣は魔を立ち葬る力を持っていた。それでも倒し切る事ができない。

そんな時、ご先祖様は見つけてしまう。魔界への扉を。魔界の扉があるのは、三つ、いや四つある。その中でも人間界か

ら魔界へ行くことしかできない『扉』がある。そこは唯一人間が見つけられることができる場所にある。他の三つは魔界にもあり行ったり来たりできるようになっているがそこは生半可なことではない。神隠し、そう呼ばれる現象が昔あった。それはその扉に迷い込み帰って来れなかった人たちがいてそれを神隠しにあったとか言っているんだ。他の人間は知らないのじゃがな。

そこへご先祖様は行ってしまった。そして扉を叩いてしまう。そして開いた門をくぐった瞬間、『雪景』に出会ったとご先祖様は言っていた。そして『雪景』に選ばれたご先祖様は『勇者』に出会った。

二人は出会い、そして共に『魔王』を倒すことを誓った。

二人は必死に戦い、ついに『魔王』までたどり着いた。

しかし、魔王の力は強大。二対一でもかなり劣勢な戦いを強いられた。

そして、このままでは勝てないと考えた二人は、『禁呪』のひとつ『封印』を使う事を決めた。

『封印』を使う時間を『勇者』が稼ぎ、ご先祖様が『封印』を使う。

じゃが、そこに問題が一つ。『封印』の魔法は発動するまでご先祖様は動けない。

『勇者』は『封印』の準備を発動させるまで、『魔王』から離れられない。

『封印』が発動してしまうと、その魔法の中心にいるものは身動きが取れなくなる。

つまり、『勇者』は『魔王』共々封印されてしまう。

それを避ける方法はなかった。そして『勇者』は『魔王』と封印され、魔界に、人間界に平和は訪れた。『勇者』という犠牲を払って」

? ? ?

蒼空はこの話を聞いて、物語の中でしか聞かないような単語を並べられて、それが真実だとかいう意味が分からない話を聞いて、頭の中の思考回路がショートするような感覚を覚えた。

普通の人なら、「なんだこの爺さん。頭がイカれてしまったか?」ぐらいで見向きもせず、思考回路がショート、なんてことはないのだが、蒼空にはそれが真実かも知れないと思わせる体験をしていたため、パニックに陥っている。必死に考え、理解しようとする、その思考を蒼空は無理やり押さえつけて、冷静さを取り戻そうとした。

「はあゝ」

大きなため息を吐く。そしてパンパンと頬を叩き、それから「で、それがどうしたんだよ。『勇者』を犠牲に『魔王』を封印してそれで世界は平和になった。それでいいんじゃないの?」

単純な思考回路に変え、その後の事を、爺さんが何を言いたかったか、それを早く言わせるように仕向けた。

「……ご先祖様が残した物は3つ。この『雪景』と『本』が二冊。一つ目の本にはこれからの事が記されていた。

そこには1000年後、『封印』が解ける、というものだった」

「……?」

「いまいち分かってないようじゃから聞こう。『勇者』を犠牲に『魔王』を『封印』したのは何年前じゃ?」

「……………1000年前」

「そう。正確には999年と362日じゃ。……つまり」

「……………」

「つまり、三日後の満月の日。『封印』は解ける」

「…………?」

もう分かった。爺さんは俺に、『魔王』をどうにかしてほしいのだ。けど冗談じゃない。そう蒼空は思いながら、怒りに震えながら

聞く。

「……それを俺にどうしろと」

「……頼む、蒼空。世界を救ってくれ。おまえには『雪景』が使える。儂はお前に教えられることはすべて教えた。お前しかない！

『勇者』ひとりでは『魔王』には勝てない。少し時間は稼げるがいずれは『魔王』に魔界は人間は敗れる。それを阻止するにはお前の力が必要なのじゃ」

蒼空は上を向く。そして無言の時間が流れる。

それに滯が少し耐えきれなかったのか心配そうな声で、

「お兄ちゃん……」

そう呟いた。そして蒼空は滯を見る。滯は泣きそうな顔で、蒼空を見ている。

その顔を見た瞬間、蒼空の迷いは、怒りは自然と無くなった。

この義妹には、人の怒りを消す能力でも備わっているのかな。

そんな、ありもしないだろうことを思う。

すると自然と笑みがこぼれた。

「分かった。やってやるよ。『魔王』だかなんだか知らないけど、

俺はやってやる」

蒼空は、なぜか心が晴れ晴れとした気分になった。

最初はふざけんな。そう言う気持ちだったのだが、なぜか世界を救わなければならぬ。そう蒼空は思い、口に出していた。

「なんでかな……。俺は『魔王』を倒さなければならぬ。そう思った。変な理由だけどそれで十分だ。世界を救ってやる」

蒼空はそう叫んだ。

第四話 決意（後書き）

お気に入り登録、感想待ってます。

第五話（前書き）

遅れてすみません。

リアルの事情がありました……。。

中々書く時間が取れませんでした。

第五話

勇者と魔王の戦いから明日。午前零時で、丁度1000年。なんの因果か、今日は満月。

魔族は闇を司る剣『アルグリード』の使い手であった魔王の血筋とだけあり、闇を好む。

ただ、月の光。この光だけは魔族は好む。

『月』。ここに秘密があるらしい。月とは太陽の光を受け、それを反射し、白く光っている。

太陽の光は魔族にとって有害だが、その光が月へたどり着くと、『月』は月面にあたると、祖に光を反射する前に魔族にとってはいいものに変えてしまう。

魔界は地球の、人間界の平行世界といってもいいだろう。つまり、宇宙は別のものであり、同じものののだ。

そして魔族は1000年後の満月の今日。たくさんの魔族の命を犠牲に、強制的に人間界への扉をこじ開け、始祖『魔王』を迎えに来るらしい。

なんでも魔族は普通、魔族は人間界と魔界を行き来することは、ある条件を満たさないと無理らしい。魔王もその基準を満たしていないらしく、それを強制的に行いこじ開け迎えに来るらしい。

たくさんの魔族を命を犠牲にしても、それでも魔族の数は多い。人間界にやってくる魔族の数は計り知れないらしい。

今夜、蒼空がすること。魔族は魔王が復活してから開けるらしい。魔王の力は強大で、それが封印から解き放たれると、今まで蓄積した者が一気に放たれ、魔界に居ても感じられるらしい。だからこの村の住民は全員眠ってもらい、爺さんがなにかをしてそれから守っているらしい。

だから、蒼空は魔王が復活してから魔族が来るまでに、魔王を倒

すこと。

魔王の復活を止めることはできないのかと蒼空は考えたがそれも無理らしい。かなり強力な魔法で封じられているらしく、封印が解けるまでは干渉が一切できないらしい。魔王が復活した直後に封印を行えば、とも考えたがその魔法を使えるものは人間界と魔界を含め、現在いない。

「これ、軽く詰んでね？」

そう蒼空は少し弱気になって呟く。

まあそれもそうだ。蒼空は魔王と戦わなければならない事はもう必至。封印もできなければ、封印を伸ばすのも無理。それに魔王は今では魔界の人でも誰も使えないような魔法をつかえたご先祖様と勇者二人を相手に引き分けた実力の持ち主。引き分けと言ってもあのまま戦いが続いていれば魔王の勝だったらしいし。

そんな相手に蒼空は戦って勝たないといけない。それも魔族が来るまでのわずかな間に。

勇者も共闘してくれるだろうがどれくらいの力量かも分からない以上、期待できない。まああきらかに自分の方が弱いのだろうけど、あつてすぐの人間と共闘ができるわけがないし。

そして、魔王を倒し切れずに魔族が人間界に来た場合。

爺さんの話では魔王を迎えにただだからおそろくなにもしない。とのことだがあてにならない。

人間のイメージ的に魔族は理性に欠け、めっちゃくちゃにしてくるというのが蒼空にも滲にもあったからだ。もし、人間界に攻撃を仕掛けてきた場合すぐに対応しなければならぬ。

魔族は魔王を連れて帰るが、それでも人間界に残る奴がいないといい切れない。

それを倒すこともしなければならぬ。

「倒せるか……？」

蒼空は右手に握る雪景を持ち上げ月にかざして問いかける。

雪景は爺さんとの話の後、すぐに貰った。そして雪景の中にも入った。

蒼空はそこで力が欲しいと叫んだ。守る力を、くれと叫んだ。そして今、この瞬間を迎えている。

蒼空は少しの間雪景を見つめる。刃こぼれや傷一つない綺麗な刀身に月の光が反射する。

「いや、倒さなきゃな。力を貸してくれよ。雪景」

そして蒼空は雪景を軽く振るって、鞘に戻す。

それからまた月を見上げた。

月を一瞥して蒼空は下へ視線を戻す。

そこには何かの儀式があるのかのように棒のようなものが刺さっており、何かを囲っている。

中心には一冊の本。蒼空が以前夢で見たあの本。

そしてそこを深刻そうな顔をして見る爺さんの姿があった。

そこを蒼空は見た。

今の時刻、午前0…00。

中心にある本が光輝き、何かを変えるような軋む音がした。

第五話（後書き）

次はなるべく早く出したいです。

戦闘予定なので遅れるかも知れませんが。

お気に入り登録、感想等待ってます。

第六話 復活（前書き）

復活です。やっと物語がプロローグから抜け出してゆく……。もう少しだ。

魔界大戦から知っている方は不快な方がいるかも知れません。今回の話からは……。だけど僕は後悔はして……。るかも知れない。

不快な方は申し出てください。
これはifストーリーにするので。

ではどうぞ。

第六話 復活

ギシリ。

何かが軋む音。

その音が際限なく、続くその不快な音に蒼空は顔をしかめそうになる。耳を塞ぎたくなってくる。

本が光っているがそんな事は気にならない。

蒼空は爺さんがどう思っているのか顔を見る。

しかし、その目線は光る本に向いていてこの音に気が付いた様子はない。

「蒼空、雪景を構えろ。来るぞ！」

「くっ？」

蒼空は必死になって耳を塞ぎそうになっている自分を止め、雪景を抜く。

そして構えた。

次の瞬間、目がくらむような白い閃光があたりを駆け巡った。

世界が光で満たされ、温かい感じがする。そして何かが軋むような音も止まり、蒼空の体は楽になる。

そして光の中、安心感に浸っていると、世界の色が黒へと変貌する。

身も心も凍えそうになる。恐怖に心が支配される。絶望に世界が支配される。

そこへまた漂ってくる安心感のような抱擁感。

その力どうしがぶつかり合い、打ち消しあい、世界に色が戻り、いつもの様子へ変貌する。

先程までほんのあった場所に、いや本は下にあるが、そこに二人の人間が立っていた。

一人目。これは人間と言ってもいいのか、黒くて、黒くて、黒い。

人型ではあるが、見ているだけで恐怖が自分の中を駆け巡るのが分かり、本能が逃げろ。逃げろ。そう叫んでいる。

その叫びを必死でこらえ、頭から消し去ろうともがく。

その蒼空の眼に黒い男の持つ剣が目に入る。2メートルはありそうな細身の長剣。剣の刀身には赤いラインが駆け巡っている。

そしてもう一人の方を見る。

そいつは夜だというのにここからでも分かるような長い金髪。

もう一人の黒い方とは対照的に、清くて、清くて、清い。

美しい。その言葉が似合うような――――女性。

そう、女性。

白い肌で、見えている手首も細く、体の線も細い。女性特有の丸みもある。

女性であることは間違いない。

服装は勇者。という単語から想像する鎧や甲冑といったものは装備していなく、防御力は低そうだが動きやすそうで、機動性に優れているようだった。

そして手には十代後半から二十代前半くらいの女性が持つには相応しくないような、剣が握られている。

その剣にも目が奪われる。

剣は両刃のもの。剣柄は深い青。剣格は金色。剣身は鞘に入っていて見えない。その鞘は金色と青色で装飾がされている。黒いほうのと比べると普通のような気もするが、そこからは同じくらいの圧倒的な存在感を出していた。

「蒼空？ 早くせい？」

爺さんの一言で蒼空は我に返った。

復活した影響なのか、魔王だと思しき男も、勇者だと思しき女性も動かない。

これはチャンスだ。二度とないような。

蒼空は動いた。高校生とは思えない俊敏性と速さで一気に魔王と

の距離を縮める。

あと数メートルで剣が届く範囲まで来たとき、魔王の眼が開き、蒼空を見た。

その眼は真紅。この満月の夜でもはっきり見える赤。

その眼で睨まれて、委縮しそうになるが蒼空はとまらず走り、一太刀浴びせる。

そしてすぐ離れる。

相手はなにしろ魔王、なのだ。何をやってくるかはわからない。蒼空は魔王を見る。相変わらず真紅の冷たい眼で見ってくる。攻撃を喰らったとは思えない。

しかし、蒼空が切った所から浸蝕されるようにして魔王は崩れ去った。

「やった？」

「まだじゃ、蒼空？」

爺さんが叫ぶ。そして蒼空の方に青い炎を放ってくる。

「何を」

蒼空が言う、その横を炎は通り過ぎる。

そして後ろにいつの間にかいた魔王に向かって飛ぶ。

だが魔王の前に黒く、渦巻く何かが現れそれを呑みこむ。

「ククク……。そうか、余は帰ってきたか……」

「そして私もな！」

いつの間にか勇者が蒼空と魔王の間に割って入った。

勇者の持つ剣が光る。

「魔を打ち払え」

光った剣で、魔王を切り裂こうと勇者は振りかぶり言った。

しかし、その剣が届く前に、勇者は動きを止めた。

いや、勇者だけでなく、蒼空も、爺さんも動きを止めていた。

魔王だけが静かに、その紅い目で夜空を見上げていた。

圧力がかかる。

すべて押さえつけられてしまうような。圧力が、空から。

息が苦しくなる。剣が握れなくなる。そんな感覚を蒼空は覚える。
「来るか……」

魔王が呟くと、勇者が顔をしかめ、蒼空の前まで後退した。

「君？ 逃げろ？」

「断る。この変な圧力……。魔族が来るんだろ？」

「それが分かっているなら……」

「俺は守る為にここにいます。ここで逃げて、君が何とかしてくれたとしても、それは俺の誇りがゆるさねえ」

「……ククク」

「何笑ってんだ？」

「いや、君は真地の子孫だろう？ よく似ていると思ってね」

そう言って勇者はニコリと笑う。

それに蒼空は少し気恥ずかしさを覚えて顔を空へと向ける。

「奴らの目的は魔王だよな？」

「そのはずだ」

「魔族が来るまでどのくらい分かる？」

「はっきりとは分からない。ただここに来るような高度な魔術と犠牲から考えると、十分。これぐらいだろう」

「じゃあ、十分に魔王を倒そうか。勇者」

「ククク。君は本当に面白い人間だなあ。魔王を十分に倒すか」

「俺が守りたいものを守るにはこれしかないだろ。勇者、力を貸してくれ」

「私の名はアリシア。アリシア・クレイだ。よろしくな」

「俺の名前は氷堂 蒼空。よろしく」

「じゃあ、少々無謀だけど、一緒に魔王を倒そっか」

そうして差し出してきた手を蒼空は握った。

「ああ。倒そう」

その手は細く、きれいだった。

第六話 復活（後書き）

勇者を女にしました。

魔界大戦の改変だからって、そこを変えるのはダメだって方は前書きでも言いましたが申し出てください。

これでいいよって方も言ってくださると嬉しいですよ。

第七話（前書き）

魔王様とのバトルです。

まあそれほど長くもないんだけど、バトル自体は。

第七話

魔族が来るまでのタイムリミットは十分。

十分以内に魔王を倒す事ができれば魔族はこっちの世界に来ることはない。

つまり十分。この時間内に魔王を倒すことが出来なければ少なからず人間は、人間界に住む者は被害を被ることになるだろう。

その焦りが見えてもおかしくはないであろうその中で、勇者アリスアと雪景の使い手蒼空は、不敵に笑っていた。

それは過去の因縁に決着を付けれるためか、守りたいものを護るために戦えるというためかは分からない。

人間、危機に直面すると笑うことしかできなくなるという眉唾物のアレかも知れない。

だけど、二人は笑っていた。

黒い髪に紅い目を持ち、満月を眺めている魔王を睨めつけ、笑っていた。

「爺さんは、魔族が来たら教えるために、月の監視をしていてくれ」
「分かっておる。死ぬなよ、蒼空」

「アリスアは俺と魔王討伐だ」

「ああ。……それより蒼空は本当に素人か。振る舞いの的にそう見えないんだが」

「素人だよ。本当の殺し合いなんてしたことがないけど……。気持ちで負けちゃ、ダメだろ」

「そうだな。では行くぞ？」

アリスアが、攻撃を仕掛ける。

魔王との距離を詰め、横風に一閃する。

その剣は魔王片手でつかまれ、止まる。魔王は一步も動いていないし、冷ややかに眺めているだけで、覇気がない。

「相変わらず、化物だな……。お前ら魔族はこの剣に触れられただ

けで、ダメージを負うものだが」

「余に、他の者と同じものにするでない。それよりそなた、腕が鈍ったか？」

「さあな」

アリシアがそう答えると、魔王は手を振り、受けた剣を払った。そこを蒼空は狙い、後ろから斬る。

このタイミングであればとても避けられたものではない。

「ふむ。中々よい作戦だ。勇者の剣で余を引き付け、後ろから攻撃。中々のものだ」

魔王は目を蒼空へ向ける。その眼には蒼空が自分に向かって剣を振り下ろすのが見えているはずだ。

「だが、余の前にそのようなもの、通用せぬ」

そう魔王は言う、普通なら避けられたタイミングではないはずだが、漆黒の自分の剣を蒼空の剣で受け止めた。

「なっ!？」

「……驚くな。まあなかなか良い斬撃だ。……しかしお前、人を斬ったことがないな？ おもしろい、それで余に対抗しようなどと、ここまで強くなれるなど……。なるほど、興味深いな」

そう静かに言う。その声に蒼空は圧倒される。

魔王の声には絶対に逆らえないと思わせるような、圧倒的な自信と、圧力が込められている。普通の人間なら、声を聞くだけで気絶するか、耳を塞いでいる頃だろう。

しかし、蒼空が圧倒されているのはそのせいではない。

この余裕に問題があるのだ。絶対避けられないと思っていたタイミングで放った剣を、軽く凌いで見せ、自分が人を斬ったことがないと見ただけで分析し、今まで蒼空が鍛え上げたものを、人間なら誰もが蒼空に屈するであろう力を持っているであろう蒼空を、蒼空の力を「なかなか良い、興味深い」それだけで済まされてしまう。

「魔王……か」

そう、その圧倒的力を持っているからこそ、威圧する声を持って

いるからこそ、彼は『魔王』と呼ばれているのだ。

「魔王の名は伊達じゃない……ってか」

蒼空は魔王と少し距離を取る。魔王は依然として動かない。アリシアも距離を取っていた。

だけど、それは蒼空にとって好都合だった。

蒼空は雪景の本当の力を使った事がない。もちろんどんな事ができるのかは聞いたし、方法は聞いたがそれを試す時間はなかった。訓練する時間などもってのほかだ。

魔王を倒すには雪景を使う必要がある。だが使った事がないのでうまくいくか分からない。試すには好都合だった。

「行くぞ。力を貸せ」

蒼空はそう言うのと、刀に力を集める。

そしてそれを自分の前に集め、形を創りだし、放つ。

できたそれは前が異様に尖った氷。当たれば貫通して、死ぬのは間違いないだろう。

それが一直線に魔王へ飛ぶ。魔王は依然と動かない。

そしてそれが魔王に当たるまで数メートルの所に行く。

氷の速さからして避けるのは不可。

蒼空が勝利を確信したその時、世界が揺れた。空気が振動する。

衝撃が世界を揺るがす。そして氷が粉々に割れ、幻想的な世界を創りだす。

しかしそれに目を奪われることもなく、蒼空達は別の者に集中がいていた。

「嘘……だろ。こんなに早く……」

蒼空が呟く。蒼空達が目にするのは魔王の足元に傳く、四人の人。その全員から力を感じる。圧倒的なまでの力を。

爺さんはなにをしていたんだと言うばかりに蒼空はそっちを見ると、こっちを見て爺さんも固まっていた。おそらくとても速く速く

いスピードだったのか、と蒼空は思う。

蒼空は月を見る。満月の中心付近に黒い穴が開いている。

おそらくそこが魔族が開けた、人間界へ来るための門。

そこから月の光に照らされ見えるのは、禍々しいような動物。人の形をしているもの。たくさん生き物、魔族がこちらへ向かっている。

おそらくこの四人は先に来たものなのだろう。

「久しいな……。ルーク」

「はい。我等魔族は貴方様の復活を心待ちにしておりました」

「初めて見る者がいるが？」

「あの時、我等四天王の三人が死にました。この三人はあの後選ばれた者です」

「私の名はジークです。王、私の力、存分にお使いください」

「私はフィシヤナです。よろしくお願いします」

「俺はヴァルガだ……です。あなた様の敵は俺が蹴散らしましょう」

「余の為にその能力。存分に生かせ」

『はっ』

全員が返事した後、ルークが立ち上がる。

「さあ魔王様。城へ帰りましょう」

そう言って、手を月の方へ向ける。

そこには道を創るように、魔族が並んでいた。

「そうだな。城へ戻ろうか」

そう言うとき魔王は空中へ足を一步踏み出す。

すると見えない階段でもあるのかのように空中を歩いて登って行く。

「主。その人間はどうしますか？」

「ヴァルガ……と言ったな。よい、捨て置け」

「そうですか」

ヴァルガは残念そうに言うと、蒼空達の方を一瞥し、魔王の後ろを追うように空中に足を踏み出す。

他の三人も同じようにしていた。

蒼空は雪景を握って動けずにいた。

動けば殺される、と蒼空に思わせるほどの殺気と存在感、威圧感を魔王と四天王は放っていた。

アリシアもくやしそうに唇をかみしめて剣を握っている。

「勇者。貴様らは今日の所は見逃してやろう。……………余は復活した。これから余達の物語は幕を開ける。さあ帰るぞ！ 我が同志よ。余の子供たちよ」

魔王はそう言うと、魔族が歓声を上げる。

そして最後にアリシアの方を一瞥すると踵を返し、空へ上って行った。

道を創る魔族は魔王が通り過ぎると後を追うように昇って行く。そして魔王がのぼって行くほどにその列に魔族が加わり、おびただしい数の魔族が魔王の後ろに続き、月の穴へと入って行った。

そして最後の一人が入りきると月の扉は完全に閉じた。

それを蒼空達は唇をかみしめながら見ている事しかできなかった。

第七話（後書き）

感想、求む……………。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9520w/>

魔界の扉を叩くとき

2011年11月20日13時56分発行